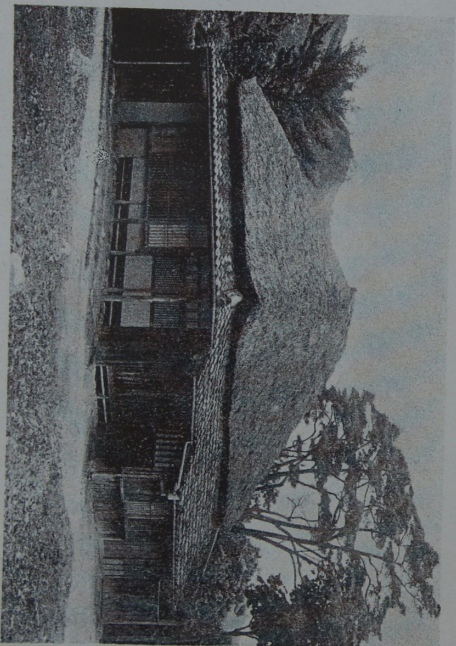


秋を於ける伊藤公

の詩集

萩に於ける伊藤公と

その
の
舊
邸



伊藤博文故宅

伊藤公ノ父重藏翁ノ養父ナル伊藤直右衛門ノ宅ナリ安
政元年ヨリ明治二年マデ伊藤公ノ宅トナル
後方ニ見エルハ重藏翁遺愛ノおがたまノ木ナリ



伊藤重藏翁

伊藤公、歳父ナリ文化十三年山口縣熊毛郡栗荷村ニ生
レ後裁ニ住メ明治二年東京ニ轉住同廿九年逝去メ



伊藤琴子刀子自

伊藤公ノ母堂ナリ文政二年栗荷村ニ生カ後萩ニ住シ明
治二年東京ニ轉住シ同三十六年永眠メ

凡例

- 一、此の小冊子は觀光客の爲めに萩に於ける伊藤公の行動及びその舊邸の説明案内
記して作りしものなり。執筆者は萩中學校教諭水沼兼雄氏の考案になるものなり。
- 一、表紙の圖案は同じく萩中學校教諭水沼兼雄氏の考案になるものなり。
- 一、此の書執筆に就ては専ら次の書を參考せり。

伊藤公全集、孝子伊藤公、藤公餘榮、藤公美談、藤公詩存、
伊藤公實錄、伊藤公銅像建設由來等

昭和十年三月

萩市役所

目次

萩に伊藤公……………	一頁
公の誕生に父重藏翁……………	三
公の出萩とその辛苦……………	三
重藏翁伊藤家の養子になる……………	六
長州藩の中間組……………	七
伊藤公舊宅……………	八
久保の塾に入る……………	一
來原良藏の感化……………	二
松陰先生の門に入る……………	三
土着精神……………	五
附 伊藤博文公銅像に就て……………	五

萩に於ける伊藤公と

その舊邸

萩に伊藤公

豪氣堂々大空に横たはる

日東誰か帝威をして隆ならしむ

高樓傾けつくす三杯の酒

天下の英雄眼中に在り。

これは伊藤博文公の明治初年頃の詩で、萩の書生等のよく吟じたものであります。誠に意氣盛に宇宙を呑むの概があるといつてよろしいのであります。その博文公も或時、

故山千里の外にあり

弧客天の涯を望む（略）

功名は素志にあらず

富貴なりとも歸るべき期にそむく

老大郷をおもふ情切なり

子等はいかでか知るを得む。

こ歌はれたのを見ますこ、樞密院議長從一位大勳位公爵なられました博文公も、郷里は定めし日夕忘れる事の出来ぬ地であつたでせう。明治二十四年故山萩に歸られた時、萩城を詠じて

江ミ山ミ秀麗なる事仙郷に似たり

舊に依りて園花尙香を帯ぶ

往事は茫々として人を見ず

古城の秋色自ら荒涼たり

の懐古の涙をそ、がれたのであります。公が十數年間此の萩の地に日夕親しまれた當時の事を今ざつこ次に記す事に致します。

◎公の誕生こ

父重藏翁

伊藤公は天保十二年九月二日、山口縣熊毛郡東荷村に生れました。

幼名は利助(後に利輔)次に春輔(又俊介、俊輔)ミ稱へられました。利助の名は祖父ミ曾祖父ミの名の一字あてを採つたのであります。

父は林重藏(巨籍面は十藏であるが、自分には重藏ミ書かれたミの事)母は琴子ミいはれました。重藏翁は村の畔頭(かたがしら)を勤められましたが、負債の出来たので他郷に出で、大に働かうこ思つて、公の六歳の時(一説には七歳の時ミす)萩に出で所々に奉公して、米搗や若黨(わかしら)なごをしてゐられました。時に藏元附の中間に水井武兵衛(たけひら)といふ人がありました。重藏翁は此の水井武兵衛が年老いてゐるので、雇はれてその代勤をする事になりました。重藏翁は勤勉實直であつたので、其の中に追々生活に餘裕も出来るやうになりましたので、郷里にある妻ミ公ミを招き寄せる事になりました。

◎公の出萩こ

その辛苦

重藏翁が妻子を萩に招き寄せられたのは嘉永二年の春で、時に公は九歳でありました。母琴子の實家秋山家の下男は、公の衣服二三枚

を持つて、恰も猿の子を背負うたやうに、比較的健康でなかつた公を背に負ひなごして、母琴子と共に萩に出て來ました。萩といふ搖籃は之より公を大英雄たらしむべく育てる事になつたのであります。

天の大任を與ふる時には必ず先づ其の人を苦しむ、萩の地は此の五反百姓の落ちぶれた一人息子を樂に育て、は呉れなかつたのであります。父重藏翁は多少生活に餘裕が出来たといへまだひきく貧乏でありまゝなので、公は家事の手傳やら他人の家に雇はれなごして、僅の飯米を得てゐたのであります。初は萩の土原の兒玉糺、藤田與次右衛門といふ家や、新堀の井原素兵衛（井原外助氏の祖父）なごいふ家に奉公してゐられました。井原家に奉公してゐられる時いつも冷飯を食べさせられて困つたといふ話もあります。此の頃は夜になるご自宅に歸つて行燈の下で熱心に習字の稽古をせられました。元來公は書が好であつたご見えて、後年になつてもよく法帖に親しまれたのであります。それでお母さんが「もう寢てはごうか」こいはれても容易に手習をやめられません。そして手習の終にはきまつて自分で人形を書いて「これは大關秀吉ぢや」こいつて、自ら秀吉を以て任せられました。蛇は寸にして人を吞むごか、大人物の

面影が偲はれるのであります。又常に萩の通心寺の側の天神社へ參詣して習字の上達するやう祈願をこめたごの事でありまゝ。

公は十一歳の頃一年間許、萩の新堀の金比羅神社の社坊で法光院といふ寺に預けられました。それはその寺の住職惠運といふ人ご公は從兄弟の間柄であるからであります。此處で公は讀み書き手習ひ等をせられました。其の頃朝目が覺めるご、枕の下を虱がぞろぞろ這つてゐるごいふ風に難儀をせられました。此の法光院は今廢寺ごなり、其の跡には圓政寺といふ寺があります。又或る頃萩の河添の福原ごいふ家に雇はれてゐた事がありました。或る夜父重藏翁は子供供の事が氣にかゝるので、福原家を訪ねてそつご様子を窺ひ見られますご、家内は寂ごして人聲もなく、唯公のみ一人ぼんやり女關の側の一室に座つて居られますので、重藏翁は家内に入り、「ごうしたか」ご聞かれますご、宅の人は皆祭禮か何かで見物に出て、公一人が留守をして居られたのであります。公は子供心に寂しくて堪へられぬ所へ、突然なつかしい父の來られましたので、思はず泣き出しました。翁はいたく叱責して、留守番を引受けながら男がそんな意氣地なしでごうするか、他日大事業をする程の者は、今少し勇氣が無くてはならぬご云つて

勵まして歸られましたが見送る公も出て行く翁も定めて悲しい事であつたでせう。
嘉永六年の春、即ち公が十三歳の時、毛利家で例年行はれる金谷天満宮の祈年祭連歌があつた時、公は給仕に出て手當の飯米代を頂戴した事もありました。

◎重藏翁

伊藤家の養子となる

重藏翁が水井家の代勤をしてゐる間に、武兵衛はもはや七十以上の老人になりましたが、元來此の武兵衛は伊藤武兵衛に申しまして、佐波郡桐畑村（今は吉敷郡大道村に編入せらる）の人で水井家の仲嗣養子となつてゐた者でありましたから、今其の跡を嗣ぐべき水井家の嗣子武右衛門がもはや成年に達しましたので、武兵衛は家を武右衛門に譲つて自分の元の家伊藤家を興す事にしました。それは嘉永四年の事でありました。爾來伊藤直右衛門に名乗つてゐました。此の直右衛門には二男一女がいましたが、何れも夭逝しましたので、外に血縁の人でも適當の者なく、且重藏翁は實直勤勉であり、其子利助は恰惻で將來の見込もあるといふので、重藏翁を養子にして、夫婦三人を引取る事にしました。其の頃重藏翁は伊藤家

の向ふ附近に住んでゐて、互に相識る事が深かつた故でもありませう、之より公等は伊藤姓を名乗る事になりました。時に安政元年で、公は十四歳の時でありました。其の頃伊藤直右衛門は新仲間組でありました。此に長州藩の階級制度の事を一言しておく必要があると思ひます。

◎長州藩の仲間組

長州藩の士卒の階級には一門、寄組、大組、遠近付、無給通等の階級があります。一門は毛利氏一族で、寄組は上士又は中士の上等であります。大組、遠近付は中士、無給通は下士で、此以下は卒族であります。それには足輕、中間があります。中間には藏元付、地方組、十三組中間、百人中間組、新百人中間組、新仲間組等の階級があります。前に水井家が藏元付中間であるを申しましたが、藏元付中間といふのは二百八十九人ありまして、元來武具の持役で中間の中ではよい階級であります。伊藤家の新仲間組といふのは俗に下兩組ともいつて組が二つあり、中間の中でも最下の階級であります。當時十川仁兵衛組、山下新兵衛組の二つがありましたから、伊藤公の事を當時の文書には十川組利助とか、山下新兵衛組俊輔とか書いてあります。

維新頃の志士として活動した長州の偉人には、此等中間組から出たものが多くあります。例へば吉田稔麿の父清内、品川彌次郎の父彌市右衛門等も中間であり、入江九一、杉山松助、時山直八、鳥尾小彌太等も凡べて卒族の出身であります。野村靖は地方組の中間であり、山縣有朋の父有稔も藏元付中間でありました。明治の元勳伊藤山縣の兩公が何れも中間組からの出身といふ事は、人物の如何は門地を問はぬ事を雄辯に物語つてゐます。人間は發憤次第でありませぬ。最も山縣公は元來清和源氏の後裔であり、伊藤公の實家は伊豫の河野氏の末流であります。明治の元勳二人が共に落魄したる名門の流れを汲んでゐるといふ事は一奇であります。

◎伊藤公舊宅

昭和七年三月廿五日伊藤公舊宅として内務省より史蹟名勝天然記念物保存法第一條により指定せられましたのは、重藏翁夫婦と共に公が伊藤家に入られた此の直右衛門の宅であります。今萩市松本新道千五百十番地にあります。草葺平家建て總建坪二十九坪、居室は五疊半一室、六疊一室、三疊三室、二疊一室、立關土間一坪臺所土間共五坪であります。此の家は安政元年より公が明治二年五月會計官權判事になつて東

京在勤を命ぜられる迄十六年間許、公や、重藏翁夫妻の住まれたもので、明治二年重藏翁の上京の際椿郷東分村（後の椿東村）倉重政七に賣却し、更に大正八年十一月末松謙澄子のもものとなり、同十年春彦子之を當時の椿東村（今の松本）に寄附せられましたが、同十二年町村合同して、椿東村は萩町に合併し、萩町は萩市となり、今は市の管理するところになりました。

此の舊宅にての公の逸話としては次のやうな事が傳へられてゐます。

直右衛門は嚴格な性質の人であり、その妻は嚴重の中にも又一脈の春風の吹くやうなやさしみのある婦人でありました。公が幼年の頃立關の傍の小さい室を居間として、朝夕讀書習字をしてゐるに、夜更けた後そつと障子をあけて、公が假寢をしては居らぬか窺いて見る事なごもあつたさうです。此の直右衛門夫婦の墓は今萩の報恩寺にあります。其の墓は明治三十二年十二月に改葬したもので、報恩寺の過去帳には持名軒本覺還入居士、萬延元年八月二日歿、伊藤十藏父、棲心院還邦順信大師、慶應四年四月廿七日歿、伊藤十藏養母とあります。直右衛門には男二人（天保九年十月廿七日歿、他の一人は文政元年八月六日歿）女一人（天保二年三月十三日歿）がありました事も過去帳に明であります。

又秋まはいへ寒い或の夜の事でありませう。此の家の便所は一度庭下駄を穿いて行かねばならぬやうに出来てゐるので、公は面倒臭いので縁の直ぐ下なる庭石の上から無雑作に放尿せられましたのを母堂に見つけられ、ひさく教訓せられました。公は後年此の時の母の教訓を思ひ出して、しみじみ往時をなつかしむ奮勵せられた由であります。

公が井原家に奉公せられてゐた時、主人は一日他家に用談に行き、雨が降り出したので足駄を借りて歸へられ、翌日先方に足駄を返却して主人の履物を持ち歸へるやう命ぜられました。公は主命通り足駄を返却し、主人の履物を持ち歸る途中、あまりに降る雪に堪へかねて、暫しの暖をこるべく松本なる我家に立寄られました。然るに母琴子は痛く機嫌を損じ、主命にて他家に使用した者が、途中寒ければきて我家に立寄る法やあるにて一杯の白湯すら與へずして歸へされました。其の時公の唇は寒氣の爲めに紫色に變じぶる／＼震へてゐたこの事でありませう。

此の話は賢母の教訓として有名でありますが、伊藤公全集正傳や藤公美談其の他には、公の十二歳の時の話としてあります。公が伊藤家に入られたのは十四歳の時でありますから、此の話は此の舊宅での出来事ではない事になります。暫く疑を存して置きます。

◎久保の塾に入る

公は伊藤直右衛門の家に入る前から久保五郎右衛門の家塾に通つて習字の稽古をして居られました。それは公の十三四歳

から十五六歳までの頃でせう。久保五郎右衛門といふのは吉田松陰先生の外叔父に當る人でありませう。當時其の塾には七十人前後の塾生があつたといはれます。其の頃藩の學校の明倫館は相當の身分のものでないし入學を許されぬので、卒業階級の者は萩の所々にある手習稽古場に通つてゐましたが、公の家は此の久保家に近く共に松本の金鑄原といふ所にありますから自然此に通學する事になつたのであります。其の後吉田松陰先生は久保の塾を引繼がれ、それが松陰先生の松下村塾であります。久保の塾では公は特に才學傑出した優等生でありました。塾生中公が唯一人畏敬してきて敵はぬと思つてゐられた同輩で親友であつた者に吉田稔麿がありました。當時は吉田榮太郎と申しまして家は公の附近であり、父の清内は水井家と同様に藏元付中間であります。此の榮太郎は後に松陰先生の門に入り、尊攘の志士として活動し二十四歳で池田屋事變に死にました惜しい人です。公は平素此の榮太郎から書物を借りて讀んで居られました。榮太郎の父清内がよく書物のなくなるので榮太郎に質ねるこゝ、あれは利輔に與へまし

た。私は一度讀めば後は不用であります。私の不用の書物が利輔の役に立てば仕合せではありませんが、こいつた由であります。一度讀めば不用だ云つた榮太郎も早くから傑物であつたでせう。此の二人は今も吉田家の庭前にある松の樹に登つて仲よく遊んでゐたに傳へられます。

◎ 來原良藏の感化

安政三年八月の頃、公は十六歳で初めて故郷の萩を出で、相模の浦賀の警備に行く事になりました。之が公が公生活に入る首途であり、又出世の端緒であります。之は嘉永六年米使ペルリが來りまして海防を嚴にする必要が起り、長州は幕命に依り鎌倉より宮田に至る相州沿岸を警備する事になり、宮田に本陣が置られました。公は宮田に派遣せられて田北多仲といふ人の配下になりました。然るに安政四年二月朔日來原良藏といふ人が宮田に來まして、交代する事になりました。此の來原といふ人は豪膽にして文武に達し、松陰先生の第一の知己でありました。來原は公の人物に見る所ありまして、極めて硬教育を施しました。公の人物を陶冶して玉成したのは全く來原の功と申してよいでせう。公も後年自分を教育して呉れた人は東荷村の三隅勘三郎と久保五郎右衛門

と來原良藏この三人である云はれた由であります。

公の宮田に出張中父重藏翁に手紙を送りて「猶又此内は御地段々御代官其外御交代も有之候様承り候得とも何ぞ御役目共は無御座候哉」にて萩に歸郷後の就職運動を頼まれて居るのも、後年公の立身出世と比較して哀はれにも又興があります。或は他の手紙では自分の着物の丈短くなつたのを訴へて「私儀も着物のみぢかう相成候に相こまり申候ばいさま、おか、さまへ左様仰上可被遣候」を嘆かれました。天涯異郷に着物の不足をいふ身分が遂に努力して大勳位公爵にまでなつたのであります。

◎ 松陰先生の門に入る

公十七歳の秋宮田出役も満期こなつて歸郷する事になります。來原は松陰先生の親友でありますので、先生に宛てた紹介状を書いて、歸萩後は先生の門に入るやう勧めました。依て公は安政四年九月歸萩し、其の後松下塾に入り幾多の同門の志士と相交り、人物、識見、學力共に立派に琢かるゝに至りました。公の松陰先生の門に入つたのは何日か正確には分らぬが、安政五年正

月三十一日に河野友之進といふ者に與へて松下村塾の事を書いた手紙がありますから、其の頃には既に入門してゐた事が分ります。

それから約一年半の後安政六年九月十五日、公は桂小五郎（木戸孝允）に隨つて萩を出發して江戸に出られました。當時の文書には桂小五郎若黨伊藤俊輔と書いたものがあります。その年の十月廿七日には松陰先生は刑死せられました。以後は公が日本こいふ大きい檜舞臺に登場して尊王攘夷の爲めに活躍せられたのであります。嘗て信濃の佐久間象山は「余は年が二十以後になつて匹夫も一國に關係するものである事を知つた。三十歳以後になるに天下に關係する事あるを知つた。四十歳以後になるに五世界に關係する事あるを知つた」云々らしい氣焔を吐きましたが、伊藤公は其の通りの人物になりました。公が江戸に出た後も重藏翁夫婦は相變らず萩に住居して、公は貧しき中より或はねば（眞綿）を送り、或は裏附（雪駄）を送りなごしました。又當時は相當高價であつたケットー（毛布）を母堂の病氣の時に送り等して孝養を盡されましたが、前申しました如く明治二年に重藏翁夫妻も萩の住宅を賣つて東京に出られました。

◎ 土着精神

萩の地は以上の様な次第で明治の元勳を育て上げたのであります。思ふに公の生れた天保九年を中心として其の前後五六年間を見ますと、長州人としては木戸孝允、前原一誠、入江九一、山縣有朋、久阪通武、高杉晋作、吉田稔麿、廣澤兵助、品川彌次郎等が生れてゐますが、山縣有朋を除くの外は皆早く歿しましたので、公の如く政治的生命の長く從て功業の著しいものはありません。公嘗て云はれますに「人としては土着精神がなくてはならぬ。土着精神とは故郷を思ふ心で、この心なきものは其の心情輕薄で物の相談に乗るべき人物ではない」と、公は亦熱心な愛郷者であつたでせう。

附 伊藤博文公銅像に就て

伊藤公舊邸の隣接せる地に公の銅像が建設せられてあります。此の銅像の由來は次の如くであります。

日清戦争後の或年の事であります。公の知友や眷顧を蒙つた人々十数名が、公の誕生日を機として銅像を造つて公に贈り、大磯の滄浪閣の庭中に据付けんことを申出しました。然るに公は自分の銅像を庭中に据付けて子孫に誇るやうに見えては困るからきて辭退せられました。然し既に建設する運びも進んでおりましたのでその處置に就て發起人は公の意中を窺ふ事に致しました。公は平素から伊勢大廟は最も尊崇する所であり、又神戸は平生景仰する大楠公縁故の地であり、且維新後兵庫縣知事として初めて朝廷の御用を勤めた所であるから、斯る地ならば予の望む所であるに答へられました。それで相談の結果神戸の楠公社の境内に建設する事になりました。此の建設に就ては桂太郎、末松謙澄、金子堅太郎、大倉喜八郎諸氏の努力が大なるものであります。然るに後年故あつて此の銅像は時の兵庫縣知事服部一三氏（山口縣吉敷郡出身）の邸内に移され、此の銅像は全く同じ形、即ち公の畢世の大事業たる憲法草案を手にする形を其の儘に擴大したものを神戸の大倉山に建設する事になりました。それは明治四十三年の事であり、其の後昭和四年服部一三氏は逝去せられ、神戸、大阪にある萩中學校出身の福本義亮、杉道助氏等は萩在住の萩中學校同窓生と相呼應して此の銅像の寄附を受け、現在の地に移轉

し、昭和五年十月廿六日公の命日を卜して除幕式を舉行しました。銅像移轉建設に要する費用は阪神萩地方の有志の寄附に據つたのであります。

萩に於ける伊藤公とその舊邸 （大尾）

昭和十三年四月十五日印刷
昭和十三年四月二十日發行

【定價拾錢】

著作兼發行者

萩市役所

責任者 河野

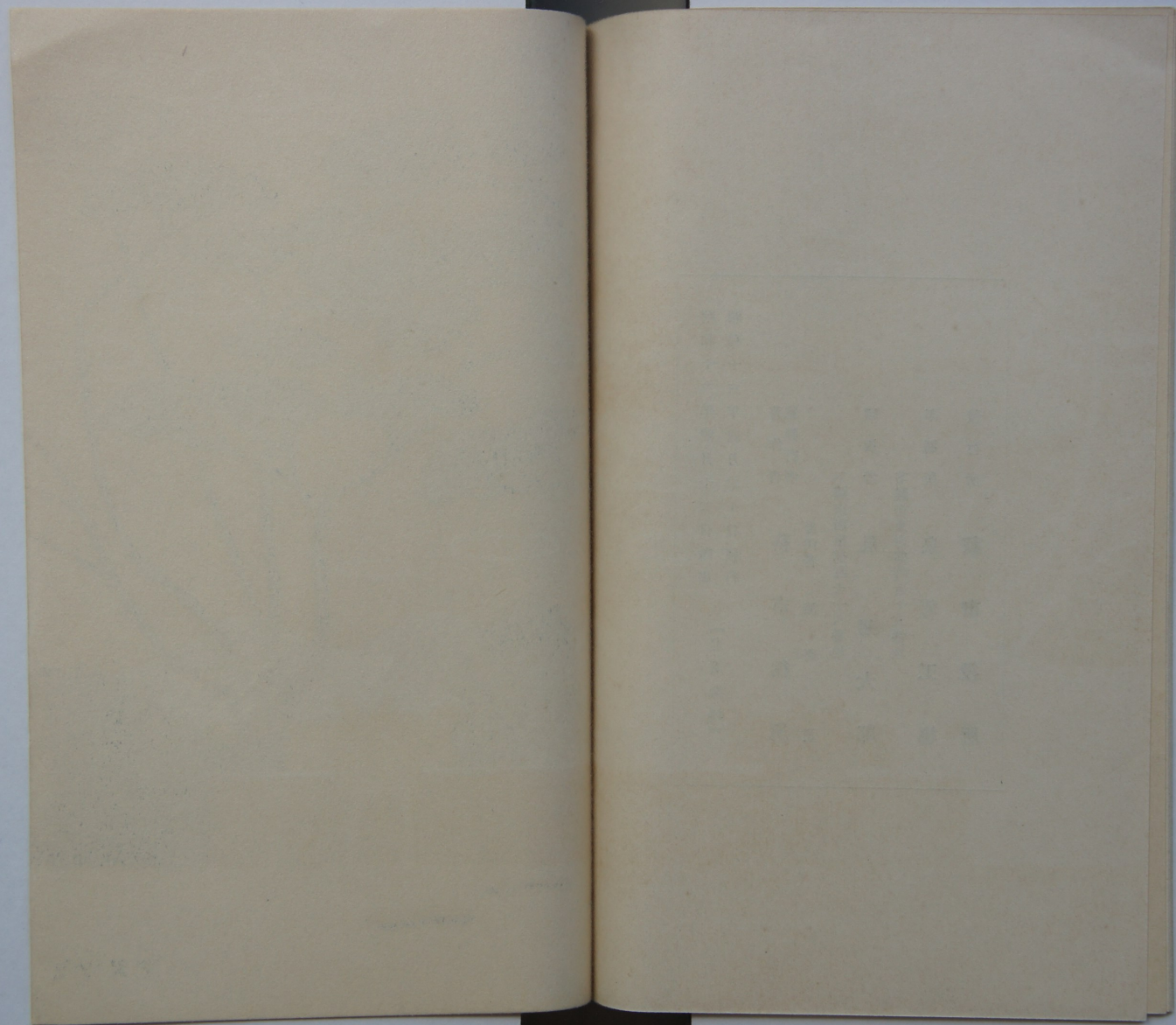
下關市西南部町七十八番地

印刷者 泉 菊 太郎

下關市東南部町百十五番地

印刷所 泉 菊 工場

發行所 萩市役所





マヌツミ